

つまづかない人は幸い

マタイ 11章 2-11節

(そのとき、)ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまづかない人は幸いである。」ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」

説教

1. ヨハネの問い

来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。

(11:3)

このヨハネの問いに関しておおきく二つの解釈に分かれます。一つは獄中のヨハネは亡き後のことを考えて、自分の弟子たちをイエスの弟子にしようと

して使いを出したという解釈、ヨハネはイエスの言動のうわさを聞いてイエスを理解した、つまりイエスを「来るべき方=救い主」として疑っていない、という見方です。そしてもう一つは洗礼者ヨハネはイエスに疑いをもったというテキスト通りの解釈です。

2. イエスのこたえ

「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」(11:5)

洗礼者ヨハネの問いに対してイエスは事実をもって答えます。ハイ、わたしはキリストです、ということではなく、ただ事実を述べて返答としています。キリストである、キリストではない、救い主だ、そうじゃない、となってくると、なにかキリストという概念があって、それに当てはまる、当てはまらない、ということ議論することになります。こんな風に考える人はいまでもたくさんいます。問題は、本当の救い主、キリストとは云々、また神とか、人とか、罪とかという概念、人間の考えにイエスはあてはめようとするところにあります。このような考え方がひっくり返らないとだめなのです。

3. 「ヨハネのスタイル」と「イエスのスタイル」

イエスは神さまを「おとうさん」と呼んで、常にその立場で、働いたり、業（わざ）をおこなったり、教えを話したりしていました。ヨハネはそのことを自分の中でじかに、実践することはできませんでした。

ヨハネは何か、本当の人間の清らかさ、本当の救いをというものを求めています。けれども実際の人間は汚いものです。みんな、罪・汚れの塊みたいなものです。だから、それを洗い流して、きれいなところへ行こう、それが大事、大切なことなのだ、というところにヨハネの力点はありました。そういう汚れに満ちた世間の真ん中に住むということをしなくて、荒野（あらの）

にいて、世俗的なものをふり捨てて、洗い流して、そして身を清めるというヨハネスタイルを生み出しました。

ところがイエスはヨハネと逆に、罪・汚れというものはすっかり消えている、それはイエスの生き方や語りが示しています。ですからイエスはどこか特別なところに行くということはありません。山の中にいかなければダメだということはなく、どこにいても神さまとの結びつきがある、逆に言えば、そこに人間の聖なる限界がある。「おとうさん」のもとで、そこで生きればいい。それだけでは足りないと思われない、充分だ、ということです。

まず罪を自覚して、その後、悔い改める。そうすれば救いにあずかれる、というのではなく、イエスの場合は「救い」が先に来ているということです。だから、アーメン、然り、ということが先にある。

そこで初めて罪というものが、どういうものかが分かるのです。

4. つまずき

イエスの事実を見て、イエス福音の響きを聞き分けて、そしてアツという風に、初めて目が覚めて、キリストはちゃんといる、救いはある、罪はおそろしいけれど、今までのようにおそれる必要はない、ということがハッと分かってくるということがあります。そのとき人は、本当にイエスにつき従う者になります。そしてその次に本当の救い主が、人のことばで語り、人の姿でふるまってください、そういう方がどんなお方かと云うことが初めて分かるわけです。イエスはこういいます。

わたしにつまずかない人は幸いである。(11:6)

しかし、わからない人もいます。同じことを聞いたり見たりしても、そんな馬鹿なことがあるか、あれは手品かなんかの目くらましだと頭から軽蔑する、相手にしないということが世の中にはあります。イエスの本当に端的なこと

ばを聞いてもあれは学問のないやつだ、大工のせがれだといって無視をする、福音を、おとぎ話だ、迷信だとして退けてしまう、これは「つまづき」です。これではイエスに従うことはできません。

5. もう一つのつまづき

もう一つのつまづき方があります。それはこういうことを語り、驚くべき業ができる方だから、この人こそキリストというのですが、そのイエスを遣わしたそのものを受け取ることが起こらないことです。

イエスがでてきた根元を抜かして、イエスを神格化してこれにすぎりつくというつまづきです。そうすると根元を抜かしてでてきた姿が絶対だということになります。すべて良いことはこの姿から出てくる、すべて悪いことはこの姿に反する、という風になっていきます。ちょうどユダヤ人がモーセの律法を絶対化したように、神殿を絶対化したように、イエスという姿を絶対化する、偶像化することになります。

ヨハネは罪という事を考えに考え、そしてそれは汚れで、それを洗うということを行いました。そして、その極限に救い主を見いだしました。ところがイエスの場合は「救い」がそこに来ています。そこから出て来たわけですからヨハネとは全然逆になります。預言者以上の者とイエスが称賛するヨハネですら、すでに来ている「救い」からでてきた者に比べると、小さき者ということになります。

しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。(11:11b)

6. まとめ

洗礼者ヨハネは牢の中で思い悩み、彼は神のみ業が理解できずとまどっていました。そして生涯の悲痛な結末が迫って来ていました。彼はいまそこに来ている救い主を見出すことなく、自分の失望の大きな苦しみだけを見ていました。

世の中の多数の人々が、クリスマスの喧噪に、ひとときの息抜きや騒ぎを求

めてています。サンタクロースを主人公にしてプレゼントを贈ったりもらいたいすることに浮かれています。しかし今年も待降節第三主日に、全世界の教会は聞いています。

わたしにつまずかない人は幸いである。(11:6)

わたしたちは神さまからすでにいただいているイエス・キリストを福音とともにみずからの内にしっかりと握り締めましょう。